

大学構内におけるチャドクガ被害防止の取り組み

静岡大学技術部 教育研究支援系 教育研究第二部門

○剣持太一

kemmochi.taichi@shizuoka.ac.jp

1. はじめに

静岡大学静岡キャンパスは、標高 307.2 m の有度丘陵の西斜面に位置し、様々な樹木が自生または植栽された緑あふれるキャンパスである。その中でもツバキ科ツバキ属のヤブツバキ *Camellia japonica* L. およびサザンカ *C. sasanqua* Thunb. は、常緑の上、冬季に花をつけるなど比較的目的立ち、景観作りに一役買っている。しかしながら、2013 年 5 月、キャンパスのいたるところでこれらツバキ属樹木に、人に皮膚炎を引き起こす恐れのあるチャドクガ *Euproctis pseudoconspersa* (Strand) (チョウ目：ドクガ科) の幼虫の多発生がみられ問題となり、同年 6 月の安全衛生委員会で取り上げられた。これをきっかけとし、本学安全衛生センターより業務依頼を受けチャドクガ被害防止のために定期的に発生調査を行い、時に捕殺等の駆除作業を行ってきた。本報告では、これまでのチャドクガへの対応方法等について紹介する。

2. チャドクガの特徴

幼虫は、チャノキ等のツバキ科の樹木の葉を食害する農業害虫として、さらにからだに持つ毒針毛により人に皮膚炎を引き起こす衛生害虫として知られる^{1, 2)}。年 2 化で、卵で越冬する³⁾。毒針毛は長さ 0.05~0.2 mm ほどの針状のものである。幼虫時にのみ産生されるが、脱皮および産卵行動によって移動し、卵塊から成虫のどの成育段階においても存在する³⁾。さらに、風等で飛ぶため、虫体に直接触れなくても発生木の近くにいるだけで皮膚炎等の被害を受ける場合がある。



図 1 チャドクガ幼虫の集団

3. チャドクガの発生調査と駆除作業

キャンパス内の通路等および広場に沿って植栽、または自生したツバキ属樹木について、樹種名と位置を地形図に記録した。それぞれの木について、チャドクガの幼虫発生および卵塊の有無を目視で調べた。発生が認められた場合は可能な限り捕殺を試み、必要な場合は所轄の部局等に報告した。卵塊の場合は付着している葉ごと切り取り、幼虫の場合は発生している周囲を 45 L のゴミ袋で包み、剪定鋏で枝ごと切り落として集め、袋の口を入念に縛って可燃ゴミとして処分した。

脚立に乗っても届かない大きな木や幼虫が分散して手の付けられない木については、安全衛生センター職員の協力のもと周辺環境への配慮等必要な措置を講じた上で殺虫剤(トレボン[®]MC、三井化学アグロ)を散布した。散布後に残った死骸や脱皮殻は高枝鋏等を使用して枝ごと切り取り処分した。

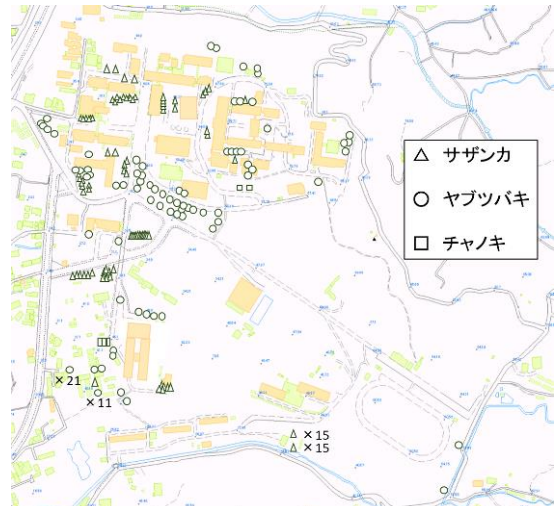


図 2 キャンパス内のツバキ属樹木の分布
(2022 年 12 月時点)

4. キャンパス内におけるチャドクガ発生状況と虫さされによる健康被害の推移

チャドクガ幼虫は 2013 年に 20 地点 50 本以上の木に発生していた。徐々に発生箇所は減少していき、2017 年以降は特定の 2~4 地点に発生が限定された。2021 年にはそれまで一切発生が無かった研究圃場のチャノキで突如発生がみられるなど懸念事項はあったがその年のうちに終息し、2022 年はキャンパス

全域で発生がみられなかった。9月末にチャドクガらしき毛虫が発生しているという通報が相次いだ、いずれも人の健康に対して無害なアメリカシロヒトリ *Hyphantria cunea* Drury であった。

2012年から2022年9月中旬までの本学静岡キャンパスにおける虫による健康被害での保健センター受診数はハチによるものが最も多く（84件）、ムカデ（16件）、チャドクガ（14件）と続いた。他の虫による被害が毎年続いて発生している中、2017年以降チャドクガによる受診が0件の年が目立つようになる等、キャンパス内のチャドクガ発生数の減少に伴い被害が減っている様子が確認できた。ただし、チャドクガの場合、刺されて即座に症状が出るハチやムカデと違って、毒針毛との接触から数時間後に症状が出る場合が多く、原因がチャドクガと判明せず「不明」に分類されたり、直接病院にかかったりする事例も考えられるため、実際の被害数より少ない可能性がある点には留意が必要である。

5. まとめ

害虫を駆除する上でまず思い浮かべられる手段は殺虫剤散布と思われるが、化学農薬は人畜や環境に悪影響を与える可能性があり、大学等の学校を含む公共の場での農薬散布は、飛散による健康被害の防止等のために必要な措置を講じた上で行うよう農林水産省および環境省から指導がなされている⁴⁾。多発生した衛生害虫に対処するにあたり、やみくもに殺虫剤の散布をする前にその害虫の生態について把握し、防除計画を立てることが肝要である。特に重要なのは食性である。生物の食性には大別して食物の選択肢が広い「広食性」と、狭い「狭食性」が存在する。今回取り上げているチャドクガは狭食性で、その食物はツバキ科ツバキ属（チャノキ、ヤブツバキ、サザンカ等）に限られる。よって管理区域内のそれら樹木の分布を把握し、適切に剪定等の管理をすることで発生数を抑えることが可能と考えられる。

これらの事情を勘案し、チャドクガに対し、以下の順に対策を講じている。

1. 不要な木あるいは剪定等の管理がしきれない木を伐採する。
2. 残す木は定期的に剪定し、枝葉が茂りすぎないようにする。
3. 卵の期間（特に冬期）に卵塊の有無を調べ、見つけたら枝ごと切り落とし適切に処分する。
4. 幼虫になってから発見した場合は安全を確認して枝ごと切り落とし処分する。
5. 木の至る所に幼虫が発生する等、安全に捕殺できない場合は周囲の環境に注意し、諸規則を遵守した上で殺虫剤を散布する。数日後に死骸や脱皮殻を枝ごと切り落とし処分する。

1と2については多発生当初に各部局に報告および提案をし、判断と対応を委ね、一部の部局で不要な木の伐採が行われた。キャンパス内でのチャドクガの発生数の減少は初期の駆除作業による影響もあるが、各部局の管理区域の樹木の把握が進み、それら樹木に対して伐採・剪定等の適切な管理が行き届くようになったことがより大きな要因と考えられる。結果的に誤報だったものの、チャドクガらしき毛虫の発生を通報する人が増えたのも職員内の害虫管理の意識の高まりによるものと推察される。しかし、チャドクガの発生しない木であるアメリカフウ *Liquidambar styraciflua* L.を見ての通報であるため、チャドクガの生態や外観について正しい情報の提供が改めて必要だと思われる。

今年度はチャドクガの発生が皆無であったが、成虫の飛翔等による他所からの移入の可能性が十分にある。増減に一喜一憂することなく適切な管理を引き続き行うことが重要である。

謝辞

本報告の作成にあたり約10年に及ぶ虫刺されによる保健センター利用者数のデータを提供してくださった静岡大学保健センター野上愛里子保健師に本紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 南川仁博：茶業技術研究 6, 15-22 (1952)
- 2) 水田国康：日本応用動物昆虫学会誌 4, 146-152 (1960)
- 3) 細谷純子：衛生動物 7, 77-82 (1956)
- 4) 25 消安第 175 号・環水大土発第 1304261 号農林水産省消費・安全局長、環境省水・大気環境局長通知